

東京オリンピック招致比較
- 日本でオリンピックを開催するには -
Comparison of three Tokyo Olympic bid campaign
-How to host Olympic Games in Japan-

1K06B178

指導教員 主査 石井昌幸先生

濱本 茉莉

副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

200 を超える国と地域から選手、役員、メディア関係者らに世界各国から観戦者が訪れ、限界にまで肥大したオリンピックは、市民生活を直撃し、都市の姿まで変貌させる。開催都市の名は世界に知れ渡り、経済効果も大きい反面、競技施設やインフラ整備などの大きな財政負担を強いられる上に、その招致活動にも数百億単位ともいわれる莫大な予算をつぎ込んでいる。日本の招致は夏季が2勝4敗で1964年の東京オリンピック以来、一度も招致を成功させていないことがわかる。そんな中、将来日本が再び招致を成功させるためにはなにを行っていけばよいのか。今回は特に過去の東京オリンピック招致を比較し、招致失敗の原因や懸念点を明らかにしながら、見えてくる招致活動成功において重要なこととは何かという疑問を、それぞれ各章でまとめていきたいと思う。

【第1章】

日本が最初にオリンピック招致に立候補した、1940年開催の第12回大会の招致活動の様子を取り上げる。どのようにして各国の票を集めていったのかをふまえながら、まとめでは嘉納治五郎の活躍について取り上げる。クーベルタンと深い親交のあった彼の活躍が東京オリンピックの招致を可能にしたといっても過言ではない。しかし、東京開催が一度決定するも、戦争との二択を迫られ、日本政府の開催権の返上を選ぶこととなった。

【第2章】

2度目の招致成功、アジアにとっても初の開催となった1964年の東京オリンピックの招致は、1960年から始まっていた。交通や宿泊など様々な問題を抱えながらも、開催が決定された裏には入念な根回しが存在した。ヨーロッパの票はウィーンやブリュッセルなどに割れると予想されるだけに、十票以上ある中南米は大票であり、いかにこの票を取り込めるかが一つのポイントとなっていた。この南米の票取りへと奔走したのがフレッド・和田・勇らであった。彼らの南米訪問により、9票近い南米の確定票を得ることが出来たと思われる。

【第3章】

ブラジルのリオデジャネイロに敗れ招致失敗となった2016年オリンピックについて取り上げる。中間評価では1位を獲得しながらも無念の招致失敗であった。その原因として私は四つあるのではないかと考えている。理念の訴求力の弱さ、東京招致に関する熱意と一体感のなさ、タイミングの悪さ、票集めをする強力な交渉人がいなかったなどが挙げられる。その中でも最大の敗因としては過去の成功した2大会の招致に比べ、裏での票集め(根回し)に長けた人物が欠けていたことが挙げられるのではないだろうか。都知事らの発言からも、交渉力が欠けていたことがうかがわれる。

【おわりに】

アメリカのように莫大なメディア放送権もない、

中国や南米やアフリカのようにオリンピックによる新たな市場開発という意義も見込めない、さらにヨーロッパのように IOC 委員が多いわけでも、開催しやすいロケーションなわけでもない。それでは、他国に比べメリットが少ない日本にオリンピックを招致するためにはどうすればよいのか。もちろんそれなりの開催意義をしっかりと示すことも大切だが、スポーツに精通した交渉力に長けた人物を IOC の内部に潜入させ、票集めや根回しを行うことも必要不可欠である。